

イワクラ学会の関東ブロックとして巨石ツアーが出来たら楽しいだろうという案が出たのをきっかけに、その準備および顔合わせの事前取材として「古代筑波の謎」を著された矢作幸雄先生を訪ねるお話が副会長の鈴木旭先生からご提案いただいたのが10月半ば。便乗する形で自分達も参加することとなった。超歴史研究会（以下 超歴研）からの参加者は金本会長、自分達夫婦3名である。

11月13日（日）8時に東京駅中央改札口で超歴研の金本会長と待ち合わせる。前日、木枯らし一号が吹いた東京もこの朝はさほど冷え込むことなく、鹿嶋行きのバスターミナルで、イワクラ学会副会長の鈴木旭先生とも偶然お会いできたこともあり、幸先の良いスタートとなった。バス中、四方山話に華を咲かせているうちに、早や、鹿嶋に到着である。

今回は、本殿前で11時に案内

鹿嶋取材記

鈴木敏幸・美佐子（超歴研）

役をお願いしている矢作幸雄先生、世界のイワクラ写真をお撮りになられている写真家 須田郡司氏、宮崎で初めてお会いし最近では、千葉の調査でも一緒にしたイワクラ学会員の畔蒜・仲田御夫妻、そして古代筑波研究会の方々とお会いすることに



挨拶もそこそこに、矢作先生自らさっそく境内を御案内いただくこととなった。奥の宮↓要石↓御手洗の池と御案内いただいたのだが長く鹿島神宮、そして筑波神社に奉職された矢作先生のお話はさすがに造詣深く、沢山の示唆をいただく事が出来た。

お話の中で、特に興味を持ったことは、鹿島神宮でも伊勢神宮と同様、式年遷宮の行事が行われていた事を教えて頂いた。式年遷宮が取りやめとなった折りに、たまたま神が御座

なっていて、総勢十一名ほどの鹿嶋散策となった。鹿嶋神宮の境内は、見事な菊の花が参道の両脇を飾り、おりしも七五三で着飾った子供達の衣装も目に楽しい。

まずは神々に御挨拶申し上げ、待ち合わせの方々と合流する。

置が本殿となり現在に至っているわけで、その当時の遷宮の地であった奥の宮は空で神様が御座されていなかった。現在の奥の宮には武甕槌神の荒御霊が鎮座されている。

要石は奥の宮の裏手にあり、

その昔は御神体として崇められていたそうで、なるほど、言われるとおりに小さな御霊石で、漬物石ほどの大きさに白玉を少し指で押したような窪みが中央にあり見た感じは、とても水戸黄門が七日七夜掘っても掘りきれなかったようには見えない。

しかし、確かにこの地の下には花崗岩の岩脈が走っているようで岩盤は遠く筑波から阿武隈の方まで続いているとのこと。鹿嶋には地震が少ないと聞くが岩盤を調べた方がこの地に要の石を置くのは場所として納得できると言われたそうだが、鯨は別としてもやはりこの地は「要の地」なのだろうか？

昔の書物には二尺の高さの要石、一尺の高さの要石の記述があるようだが、今はまわりの落ち葉から出来る腐葉土により少しずつ高さを失って、すり鉢状に少しばかりの頭を覗かせているのみで、神宮の境内だからこそ埋もれずにこの何百年かを過ごせたのだろう。ただの山中で

あったなら、とつづくに忘れ去られ埋もれてしまっているに違いない。ここでもイワクラ保存の大切さを親身に感じた。

奥の宮の下にある御手洗の池は、神社創建当時より、きれいな湧き水が存在していたようだが今でも神秘的で透明な水が湧いている。矢作先生が子供の頃、この御手洗の池で良く泳いだそうだが。夏冷たく、冬暖かかったという鯉の泳いでいる池は、昔はもつと人々の身近であったようだ。それだけ、神社と地域が密着していたのだろう。

昔はこの御手洗の池の側が参拝の船着場であったそうで、この池で禊をしてからお参りするのが慣わしだったと伺った。禊をして坂を登ると奥の宮に至るわけでそう考えれば、やはり現在の奥の宮が従来本殿のあった場所であるように社殿のない時代は、要石が御神体だったのかもしれない。御手洗池から近くの鳥居を出て昔、船着場だったと伝わる辺りを歩き神宮の脇か



ら本殿に戻る。

実は、取材前に鈴木旭先生とメールで交わしたあるエピソードがあった。今回の鹿嶋参拝の折、是非訪れたい場所がある事をお伝えしておいた。本殿裏手にある「鏡石」を是非拝見できないか？という内容であった。常陸（日の立つ）国の東に位置するこの鹿嶋の地に存在する意義は大きく是非取材したいと話していた。鈴木先生も矢作先生に言い出すタイミングを伺って

いた様子であったが、いきなり矢作先生から「鹿島神宮には要石と同様あまり知られていない「鏡石」というイワクラがある!？」と切り出された時には、思わず鈴木先生と目を合わせてしまった。偶然といえば偶然だったのだがイワクラ学会の取材としての趣旨が矢作先生に伝わっていたのだろう。一般には公開されていない神域にある「鏡石」を、矢作先生の御尽力で拝見することが出来た。

本殿の右手から柵を開けていただけ、本殿の裏手へと進む。「鏡石」は本殿の真後ろに、柵で囲まれ静かに鎮座していた。大きさは80cmくらいの円形で表面は、見事なまさに鏡のように平らになっており今まで数多くの「鏡石」と呼称した岩を見てきたがこれほどまでに「鏡」の形に造られたものは初めてである。

落ち葉が水平な岩の鏡面に落ちていたので払い清めたところ石は本当に鏡のような面を、まっ



すぐ天上を仰いで静かに鎮座していた。同行された石の写真家須田郡司氏も、しつかりこの「鏡石」に魅入られている様子でなかなか立ち去ることが出来なかった。自分をはじめ石を見ると引き寄せられてしまう悪癖がここでも垣間見られた。(苦笑)

敏幸 記

念願の鏡石にも対面できたところで、近くの料理屋で矢作先生の手配してくださったお弁当を一同おいしくいただきました。おいしいおそばや刺身こんにゃくに舌鼓を打った一同は、次に腹鼓を打ちつつ午後の散策へと出かけることになりました。せっかく、鹿嶋に来たのだからとの矢作先生のお心づくしです。まずは、矢作先生が神主をされている龍神社をお参りしつつ、鎌足神社へと歩きます。

藤原の鎌足の生誕地と伝えられた処で昔はこの地は入り江に近く、産屋を立てたところだとか…。当時の産屋は海辺か川岸に産屋を建て、そこで子供を生み忌み日があけたらその産屋を水に流す風習があったとか。きつとこの海辺の地では、鎌足様にあやかりたい女達が、大事にこの地を守ったはずである。鎌足神社の近くに、景行天皇の御代 新造した三隻の船を収めたと伝わる「津の宮」という跡

地がある。現在は、鹿嶋神宮の境内に移されているが、そこには、伝説の甕(かめ)が今でも埋まっているかも知れない「甕山(みかやま)」があったという。矢作先生の子供のころには甕山と他にも大小二つの塚があ



ったというけれど、今は道路になり、その面影もなくなつて、かすかにそのことを伝える碑が残るのみである。タケミカズチのミカを雷と書かずに甕の字を

与えることもあるように、この地には甕の伝説等も多い。神的にも重要と思える甕がここにあるのはおもしろい。『神日本』に書かれた船から見えたと伝わる海底に沈む鮮やかな大甕は、果たしてどこにあったのだろうか!?!。海に浮かぶ島であったのかも知れないこの甕山からは発掘調査の時には、杯、皿、柱などが発掘されたが伝説の大甕は出なかつたという。しばし、海底だったであろう道を歩きながら、鹿嶋神宮への航路を思い浮かべてしまう。そんな時間を持てるのも、案内役の方のお力に負うところが多くあることに気づかされる。感謝、感謝の思いが新たとなる。鹿嶋、香取の両神宮を門に見立てると、はたして、日本武尊の通られたあの流海(ながれのうみ)の航路から、どのような景色が見えたのであろうか? 鹿島、香取両宮には、はさまれたこの海の上で正面に見えたであろう謎の筑波山であることが急に気になってくる。

層気楼のような海に想いを馳せているまもなく私達は、根本寺に向かう。やはり、芭蕉も船でこの寺を訪ね来たとあり、庭には句碑が建てられてういて、この地が海辺だったことをここでも感じられた。地元のことや歴史を含めて肌で感じられるのが、フィールドワークの醍醐味かも知れない。この寺には筑波歴史研究会の吉田さんの祖先に当る鹿島氏代々の墓があり、一同で墓に参ってから、鹿嶋氏ゆかりの鹿嶋城址公園に連れて行っていただいた。向かいの山々には沢山の古墳群があるとのこと、昔から栄えていた土地だと良くわかる。鹿嶋城址公園からは今も流海が見える。鹿嶋神宮の船着場までも、もうわずかである。鹿嶋城址公園を後にした私達はここで、矢作先生の研究室でもあらせられる回帰洞に伺った。そこでは矢作先生と鈴木先生のトークショーとなり、同席した私達はまことに得をした気分になった。

秋の日はつるべ落としに暮れ、あつという間にお別れの時間となる。来年春に開催予定の「筑波山イワクラ散策ツアー」の案内役を兼ねて矢作先生にお願いして、来春の再会を楽しみに回帰洞を後にした私達は、まだ別れがたかった。近くの喫茶店でお茶を飲み、一同で筑波ツアーの下準備を確認しつつ、今度は会員の皆様と共に楽しめるようにと祈りを込めながら再会を約束した。さて、鹿嶋駅まで送っていただいた私達東京組は、駅に残されたが落ち着かない。そう、お約束のビールが買っていないことに気づいたのだ。しかし、駅前が暗い……コンビニも見渡したところなさそうである。バスが20分おきにあることを確認するや、駅の反対方向を探索しに出發するも、見事に勘はずれて何も無い。ここできらめようなどとは誰もおもわないところがすごい！根性で駅近くのビジネスホテルを探してたら、入口の横にはなんと「買

って！」と言わんばかりにビールの自販機が待っているではないか！感じの良いフロント嬢に断ってビールを調達できて、一同大満足であった。安心して、バスにて出發して、仲田夫妻からいただいた、純正千葉産ピナツツをつまみに皆、心地よく酔っていく。ほろ酔いとほろ睡魔にゆれながら東京駅に着いた。もちろん、駅についてからも駅構内の居酒屋さんでビールを飲みながら楽しい一日を反芻してからやつと家路にと向かった。鈴木旭先生は、歩くことも大それたけれど、座つてする勉強やトークも大切だとおっしゃっていらした。今日は、両方がバランスよく配合されていて楽しい一日となった。もっと多くの皆様と有意義で楽しい時間を、来年春開催予定の筑波ツアーで持てるのを楽しみに拙いながら鹿嶋散策の報告とさせていただきます。

美佐子 記 了

2006 年第 4 回イワクラ研修ツアー

— 予告 —

第 4 回イワクラツアーは、関東ブロック主催で筑波山を予定しています。

日・時未定ですが、2006 年春ごろを予定しています。詳細は、別途お知らせします。